
星の使徒 ～古の賢人～

円入健策

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の使徒　　＼古の賢人＼

【Nコード】

N0795BA

【作者名】

円入健策

【あらすじ】

時の止まった少年は、一つの剣によって導かれ、剣のように気高く何ものをも貫く強い意志を持って、自ら心を取り戻した。

滅亡の使者、安倍神一を倒し、漆黒の霧につつまれた世界に再び光を照らし出し、

彼は何処かへ消えてしまった。

ヨハネを愛したエレミアは、毎年、彼の誕生日である7月7日に、

星のよく見える山へ行き、帰りを待っていた。
だが、彼は再び姿を見せなかった。

エレミアは魔術学園ポラリスを卒業。その後、学園の超能力学部の講師に就職した。
時と共に成長を重ねるエレミアであったが、彼女の思いは変わらなかった。

ある日、エレミアは天才少年カールと再会し、相談を持ち掛ける。
カールは過去の世界に渡ることの出来るタイムマシンの話を始めた。

しかし、歴史を変えてしまう恐れを知っているため、途中で話をやめてごまかした。

気になるエレミア。再び話を掘り起こそうとするが、カールは「なんでもないよ」と

口を閉ざす。仕方なく、エレミアはカールと別れ、研究所を去ろうとした。

しかし、彼女の野望は抑えられることはなく、
関係者以外立ち入ってはならない区域をくまなく調べた。

やがて、一つの実験室を見つけた。そこには製作途中であるタイムマシンがあった。

「もしかしたら、このタイムマシンを使えば過去に戻ってヨハネに会えるかもしれない」

確信したエレミアは勝手にタイムマシンに乗り込み、電源をオンにして、

起動させてしまった。何かの拍子に機体に支障が生じ、警告音が鳴り響く。

警告音を聞いて駆けつけたカールは降りるように叫んだが、
エレミアの固い意志には届かない。

タイムマシンは眩い光を發し、エレミアの姿を消してしまった・・・。

慌てふためくカール。

タイムマシンによつて飛ばされたエレミアの運命は果たして・・・。

オープニング（前書き）

第一部「ヨハネの大冒険」の続編です。

第二部をお読みになる前に第一部を読んでいただけると、なお楽しめるかと思います。今回は長旅になりそうですが、何卒お付き合いの程よろしくお願い致します。

オープニング

滅亡の使者、安倍神一が待ちうける宇宙ステーション。

ヨハネたちは彼の目の前に立ち、今まさに激戦を繰り広げている最中だ。

神一はエンの猛攻に追い込まれ、醜い真の姿をさらけ出す。

自暴自棄になってしまった彼の行動によって宇宙ステーションの自爆システムが作動。

爆発まであと15分。ヨハネはみんなを逃すため、神一の攻撃を食い止める。

エレミアと一緒に逃げようと言い、その場をためらっている。

「早くいけええええー！」

ヨハネの叫ぶ声によって服従するかのようになり、仲間たちは逃げた。

再び振り返ったエレミアの顔を見て、ヨハネは笑顔で返した。

エレミアは胸が締め付けられそうになり、一度足を止めてしまったが、

感情を振り切って、すぐさまその場を去った……。

あれからどのくらい経ったのだろうか。

かならず……、必ずヨハネは帰ってくる。

いつもの日常に戻り、不安定な精神の中で何とか自分を保っている。いろんなバイトをして、たくさん勉強もした。

夢であった、魔術学園ポラリスの超能力学部講師にもなった。

休む暇もない日々を送ったが、唯一、ヨハネのことだけは忘れな

った。

ヨハネの誕生日である7月7日。

エレミアは綺麗な星の景色が見渡せる観光スポット、星降る山に登り、

ヨハネの帰りを待っていた。

しかし、いつも返事として帰ってくるのは、星の輝きと月の微笑みだけであった。

時は進んでゆき、エレミアが二十歳になったころ、

あきらめずにもう一度、星降る山に登って空を見上げた。

今年もおなじ星空。だめかな……。ヨハネに逢いたい……。

切ない気持ちでいっぱいになり、涙をこぼした。その時、一つの流れ星が流れていった。

その流れ星はまるでエレミアを励ましているかのようだ。

もう一度逢えますように……。

そう願いをこめたエレミアはいつの間にか元気を取り戻していた。

日曜日。エレミアは休みを利用して、ある人物のもとへ会いに行くところである。

「今から行くね」と電話をして家を出た。鼻歌を歌いながら、玄関の門を閉める。

今日は特別に気分が良い。そのわけは、この前の星降る山で流れ星を見たときに、

とあることを思いついたからだ。その計画を実行するためにドイツへ旅立つ。

着いたところはアストラル大学。そう、あの天才少年カールと会う約束をしていたのだ。

待合場所で約束していた一階の院内自然庭園へ移動した。

そのなかに緑色のベンチがあり、そこにカールが座って待っている。カールはエレミアに気付いて走りよってきた。

「ミアねえちゃん、久しぶり！」

「ひさしぶりだね！元氣してた？」

二人はベンチに座り、久々に再開した喜びを分かち合っている。エレミアが講師になったこと、カールが名誉教授になったこと、互いに今までであった出来事を話していた。

会話のネタがそろそろなくなって来たとき、

エレミアは本来の目的である、あることを聞き出す。

「あのね、カールくん、ちょっと聞きたいことがあるの。」

「うん、なに？」

「昔に戻ることで出来る・・・？」

あまりにも唐突な質問であったが、カールは気にもせず答えた。

「もちろん可能だよ。時空移動が簡単にできるタイムマシンを・・・」

カールは熱意にタイムマシンを語り始めようと思ったが、エレミアの思考を読んで、語らずにはいられない欲を抑えつつ話を絶った。

おそらくはヨハネと再会するために過去に戻るであろう。

そうなれば、たった髪の毛一本のような些細な出来事に触れてしまえば、

歴史を大きく変えることに繋がってしまう。

それを恐れたカールは、なんとかごまかそうと嘘をついた。

「あくでも、まだ実験段階中で、実際に僕らが使える状態じゃないんだ。

200%の安全な結果が得られるまでには、まだまだ時間がかかるんだ。」

「そうなんだ・・・。」

エレミアは沈んだ表情を見せた。カールはエレミアの気持ちを考えて言葉をおくる。

「ミアねえちゃん、元気だして。

僕も歩む道に大きな壁が立ちふさがって何をしててもだめな時、新しい道を作って前に進んできた。

ミアねえちゃんも新しい道を作ってみるといいよ。」

「・・・うん。ありがとう、カールくん。」

約束の時間が過ぎようとしていた。名誉教授となったカールのスケジュールは
ぎっしりつまっていて、ようやく手にした憩いの時間であった。

二人はベンチから立ち、わかれの挨拶をした。

「ありがとう、カールくん。せっかくの自由な時間なのに。」

「ううん、いいんだよ。ミアねえちゃんに会えてよかった！

こんどは一緒になにか遊ぼうね！」

「うん！」

カールは名残おしそうに、手を何度も振って行ってしまった。

エレミアは少し微笑んでいた。先ほどカールが嘘をついていたことに気がついていたのだ。氣遣ってくれたカールにありがとうと心でつぶやいた。

「私ってちょっと性悪かな。」

そう思いながら、さきほど超能力の一つ「マインドハック」でカールのイメージから見えていたタイムマシンの場所へ向かおうと試みた。

だが、その行く場所の途中では何名もの研究者や警備員がうろついている。

見つければ追い出されるに決まっている。

そんなこともあろうかと、エレミアはインビジブルポーションという、

透明人間になれる薬を持ってきた。

自然庭園の茂みの中に隠れて、ポシエットから薬を取り出して飲んだ。

みるみるうちにエレミアの姿が消えていく。

「これで大丈夫ね。効果が切れる前に早く行かなくちゃ。」

エレミアはカールのイメージを頼りに、進んでいった。

以前行ったことのある工学部の前だ。もちろん扉にはセキュリティでロックされている。

後ろから研究員がやってきて、認証を済ませると扉が開いた。

そのチャンスを見計らって、一緒に奥へと入っていった。

東京ドーム一個分の広さを持つロボット研究開発施設。

その中に特設された部屋がある。

『タイムマシン研究室』

この部屋には特別配属された研究員でしか入ることが出来ないようだ。

エレミアは鉄の自動ドアの目の前に立ち、腕を組み、どうしようかと考えていた。

「早くしないと薬の効果が消えちゃうし・・・、どうしよう・・・。」

「

考えているうちに、いきなり自動ドアが開いて中から研究員が出てきた。

エレミアはわずか数センチ手前にいるハゲた研究員の顔をみて思わず声を出してしまった。

「うわっ！」

研究員はその声に驚いてあたりを見回した。

エレミアは手に口を添えて、そっと部屋の中へ侵入していった。

（あゝびっくりした。いけない、いけない・・・。

でもよかった。入ることができて・・・。）

自動ドアが閉まり、ガシャンとロックがかかる。

いくら透明人間になったとはいえ、心臓のドキドキはおさまることを知らない。

ようやくタイムマシンとのご対面。

白銀のボディ。外郭には巨大リングのようなものがついている。

中には一人用の座り心地のよさそうなソファのような椅子があり、乗り込んで内部の操作パネルでマシンを扱うようだ。

幸運にも、今出て行った研究員以外に誰もいないようだ。
インビジブルポーシヨンの効果もちょうど切れた。

「いましかないわ。」

エレミアはタイムマシンに乗り込んだ。
それと同時にオートでタイムマシンが稼動する。

ヴーン・・・ シュウィーローン・・・

手前にあるタッチパネルに明かりがともり、無機質な音声ガイドが流れる。

『こんにちは。時空旅行をお楽しみください。今日はどちらへ向かわれますか?』

パネルに過去と未来の文字がうつしだされた。
エレミアは過去のボタンをタッチした。

『過去ですね。忘れそうになったあの時の思い出、再び体感して心に刻みましょう。』

次に、行き先となる年月日、時間を設定してください。』

「うーん、4年前だったらヨハネもまだ家にいる頃だと思うし・・・
きめたっ!」

エレミアは今から4年前の時間を設定した。

『確認してください。以上の設定で過去へタイムワープします。』

内容がよろしければ、確定ボタンをタッチしてください。』

エレミアは満天の笑みを浮かべながら、確定ボタンをタッチした。

「やっとこれでヨハネに逢えるんだ・・・！」

タイムマシンのエンジン音が大きくなり、外郭のリングが高速回転を始める。

『それでは良い旅を。』

嬉しさのあまり、待ちきれなくて足をぶらつかせている。

タイムマシンのあたりに白い光で包まれる。

部屋の景色が、覆われている光によって見えなくなるその時である。

ガンッ！

ぶらつかせていたエレミアの足が激しく機体にぶつかってしまった！
その衝撃でタイムマシンは誤作動をおこし、警告音が鳴り始めた。

ピユイピユイピユイピユイ・・・

「あれ？私なにかマズいことしちゃったかしら・・・？」

この警告音がロボット研究開発施設のメインルームに伝わってしまった！

ちやうどそこにカールがプロジェクトチームと会議をしていたところだった。

突発的な警告音を耳にした一同。カールは椅子から立ち上がった。

「ま、まさか、ミアねえちゃん！」

急いでカールと数名の研究員はタイムマシン研究室へ駆けつけた！

「ミアねえちゃん、はやく赤い緊急停止ボタンをおすんだ！」

エレミアは緊急停止ボタンの場所を目だけで確認した。

・・・しかし、カールの声が聞こえていないふりをして、動かずにじっとしている。せっかく手に入れたチャンス、絶対に失いたくない。

タイムマシンから眩しいくらいの光が発し、とうとうエレミアを過去におくってしまった。

カールはただ呆然と立ち尽くす。

「ああ・・・どうしよう・・・。大変なことになっちゃった・・・。」

エレミアはタイムマシンに座っている。

周りの景色は真っ白で、時たま過去に目にした人物、建物、風景が下から上へと

飛んでいく。どんどん過去にさかのぼっていく。

ヨハネの姿が見えた。

しかしそれを通り過ぎてしまい、更に深い谷底に落ちていくような感覚を味わう。

「あっ！ヨハ・・・どこまで行っちゃうの？4年前に設定してたのに！？」

エレミアはタイムマシンのパネルを再確認した。

『415年3月21日』

「415ねん?! どういうこと?・・・あっ、まさか・・・」

エレミアは思い出した。

足をぶらつかせていた時、機体に思い切りキックしてしまったことを。

頭を抱えながら、やってしまったことに後悔を感じている。

「どうしよう・・・私この先どうなっちゃうの・・・?」

ガタガタガタ・・・

機体から音がする。

何だろうと思い、機体の周りを見た。

大変なことに、まるでスペースシャトルが切り離しをするかのように、

一つずつ部品が外れて行き、時空の狭間に飛んで行っているではないか。

「このままじゃ私も消えちゃう! たすけて!」

最後に椅子だけが残し、その椅子も消えてしまったその時、
真っ白いあたりの景色が見たことのない木造の屋内へと入れ替わり、
エレミアは強烈なしりもちをついた。

ドスンッ！！

「いったい……助かったみたい……」

薄暗い部屋にはいくつもの研究物資が並んでいて、少しホコリくさ
かった。

ここは小さい一軒家ようだ。そして誰かが何らかの目的で研究を
行っていたらしい。

エレミアはおしりをさすりながら、目先に見える扉へ歩いていった。
この扉を開けるとどんな世界が待ち受けているのであろうか。

もとのいた時代に戻ることができるのだろうか。

そして……、ヨハネと再び逢うことができるのであろうか……。

彼女の壮大な冒険が、今、始まる。

オープニング（後書き）

オープニングいかがでしたでしょうか。

これからどんどん連載していきますので楽しみにしてくださいね！

【手に入れたアーティファクト】

科学者の名刺

＜第一節＞ 旅支度の一週間

＜第一節＞ 旅支度の一週間

何年も使っていない、薄暗くてホコリくさい研究小屋。
エレミアの目の前にある扉から、外の光がもれている。
そっと近づき、扉を開けた。

強烈な眩しさがエレミアの目を襲った。思わず手で覆い隠す。

耳からは街人のざわめきが入ってくる。

次第に目が慣れてゆき、外の景色を傍観した。

3月21日。春が訪れ、過ぎしやすい季節。

ちょうど、ぽかぽかと太陽が照らしていた。

地面はレンガで綺麗な模様で敷き詰められている。

あたりの建物はレンガ造りや、岩山を掘った家がひととき目立つ。
カンカンと鉄を打つ音が、どこからか聞こえてくる。

鍛冶屋か何かだろう。

「号外！号外です！」

西から声がした。人々が声のする方向へ走ってゆく。

エレミアも気になって付いて行った。

広場に入ったところの大きな一本の木のそばに、多くの人だかり。
エレミアも号外が気になって、もらおうと近寄ってみるが、
人が邪魔になって手が届かない。

「これじゃあ届かないよ。」

エレミアは仕方なくその場を離れた。

トボトボと、来た道に戻っていると、いきなり突風が吹いてきて、先ほどの号外を運んでくれた。

足元に届いたドロと水のついた号外を拾い上げる。

エレミアはその一面を見て驚いた。

『英雄、最後の戦い！』

そう書かれており、写真にはなんと、ヨハネが写っているではないか。

荒れ果てた大地にもう一人、向かい側にローブ姿の男が。

暗くて顔がはっきりしていない。記事にはこう書かれている。

『遂に！英雄ケテルと滅亡の使者の最後の戦いが始まろうとしている！』

「英雄ケテル・・・？でもこの人、間違いなくヨハネだわ・・・。」

更に記事を読んでもみると、決戦の場がかかれてあった。

『決戦の場はフラムベルグ大陸、ディアス帝国領土、漆黒の大地で行われる模様。』

「きつとここに行けば・・・、ヨハネに逢えるのね！」

エレミアは確信し、目的地として決めたのだった。

しかし、自分のいる場所を把握しておらず、地図も持っていない。とりあえず、人に聞いてみようとしてエレミアは鍛冶の音がする方向へ足を運んでいった。

歩きながら外の景色を満喫する。落ち着いたメープル調の色彩で、

建物のほとんどが生産所や商店ばかり。

時たま変わった突風が吹き荒れることもある。

人々はあまり外には出ておらず、車道があり、蒸気で走る車が走っている。

向かい側から、5、6人くらいの男たちが歩いてくる。

黒いススがついた白いシャツに作業ズボン、ヘルメットをかぶっている。

この人たちはどうやら炭鉱父のようだ。笑顔で話し合う炭鉱父たちとすれ違い、

エレミアの目の前に鍛冶屋が見えてきた。

店の前に大柄な男が椅子に座って酒を飲んでいた。

その男はエレミアに気付いて、声をかけた。

「ん、お嬢ちゃん、こんなところに何しにきたんじやい？」

「あ、あの・・・」

エレミアは少々不安になりながらも、この街について聞いてみた。

「がはは。見知らぬ顔だとはおもったがやっぱりそうだったか。

まあ家の中でゆっくり話そうや。

か弱いお嬢ちゃんが突風の中を突っ立っておるのは可哀想だかな。こっちだ。」

そういつて、中へ案内してもらった。

少し風化している岩山でできた家。何年も続いている鍛冶屋だ。

燃え盛るかまど、顔の大きさほどもあるカナヅチ。様々な武器や防具が並んでいる。

エレミアは客間のテーブルにたどり着いた。

「さあ、そこに座ってくれ。俺はエドワード。よろしくな。」

おーい、クリス！お茶もってこい！ついでに酒もだ！」

エドワードが大声を放った。

すると、一人の青年がお茶とお菓子を持ってきて頭を下げた。
鍛冶の作業中だったのか、汗だくだ。

「こんにちは。毎度、有難うございます。」

「ばかやろう、客じゃねーよ。酒はどうしたんだよ！」

「父さん昼まっぱから酒飲まないでくれよ。すみません。失礼します。えへ。」

クリスはエレミアのことを気にしながらも、作業に戻っていった。
エドワードは街について詳しく話をしてくれた。

「この街はなあ、ラーゼンと言うんだ。腕に技術をもった職人が集まる街さ。

しかし面白いな。この街に来るには空路しかないのに、
お嬢ちゃんは知らずにこの街にきたってか？まあ深くは問わねー
がな。」

エレミアは紅茶を二口つけた後、エドワードに質問した。

「おじさん、フラムベルグ大陸っていうところはどやって行けば
いいの？」

エドワードはエレミアの発言のおかしさで笑ってしまった。

「んあ？ははは、またおかしなことを聞くもんだ。

ここラーゼンに来るためにはディアス帝国というでっけー国から

しかこれねんだ。

ディアス帝国はフラムベルグ大陸にあるんだよ。

お嬢ちゃんはまたディアスに帰りたいのか？」

「う、うん。」

「そうか、がはは。この街も知らないようじゃ、飛行船乗り場もわかんねーだろうし、

ほらこれ、地図をやるよ。」

エレミアはラーゼンの街の地図を手に入れた。あとは飛行船乗り場に行けば、

ディアス帝国に行ってヨハネのいる漆黒の大地にいける。

しかし、肝心なのは飛行船にのる運賃を持っていないことだった。

エレミアはお金を持ってないことをエドワードに話した。

「そうか、金もってねーのか。そうだなあ・・・。

おなごにカナヅチもたせるわけにはいかねーし。

そうだ、1週間だけ、看板娘としてビラ配りと接客をしてもらえんかな？

そしたら分け前として運賃をやるぞ。」

「おやすいごようよ！」

エレミアは男くさい場所で働くことに少し嫌味を感じていたが、ヨハネに逢うためならばと我慢した。

しかし、その気持ちはすぐに消えることとなった。

「寝床は母ちゃんどこを使ってくれな。」

そういうとエドワードはクリス呼んで、1週間居座ることを伝えて、

寝床へ案内させるように言った。

「エレミアさん、こちらです。ここが母さんの部屋です。

いつも掃除をしていたのでキレイですので安心して使ってください。

あ、あと、ちょっとしたら広場でビラを配ってもらえませんか？」

「うん、わかったわ。ありがとね！」

クリスは女性にあまり免疫がないのか、恥ずかしくてエレミアの顔が見れない。

用件を済ませたら、逃げるようにして去って行ってしまった。

エレミアはベッドで仰向けになった。

早くヨハネに逢いたいな。そんなことばかりしか頭になかった。深呼吸して、心の中で「がんばろう！」と言い、起き上がった。

そのとき、化粧台の上におかれていた花柄の写真立てにめが行った。写真には陽気な女性とエドワード、まだ幼いころのクリスが写っている。

愛の溢れんばかりの一枚の写真だ。この人がおそらく母親なんだろう。

写真でエレミアの気持ちが和やかになった。

エレミアはビラを配りに行くため、作業を中断して休憩しているクリスに声をかける。

「あ、も、もう行かれるんですね。これビラです。

広場はカップベース広場、知ってますか？地図でいうとここです。」

「ここなら知ってるわ。」

「よかった。では、おねがいしますね。」

「うん！いってきます！」

エレミアはビラをもって出発した。クリスはもう一声かけてエレミアに伝えた。

「あー！キャッチフレーズは

『俺の武器は世界一！自慢の腕！エドワード工房』ですからねー！」

「わかったわー！」

エレミアは振り向いて返事をしたあと、広場へ向かっていった。

広場には多くの人でにぎわっている。

大道芸人や、カーペットを敷いて露店を開いている人もいる。

エレミアは先ほど号外を配っていた人の場所、一本の木を陣取って、すこし恥ずかしがりながらも、キャッチフレーズを言いながらビラ配りを始めた。

「おれのー武器はー世界一！自慢の腕！エドワード工房をよろしくー！」

おなじみのキャッチフレーズだった為か、

あっという間にエレミアの近くに多くの人が寄って集まってきた。

ビラには特売という文字が書かれていたが、人々はそれよりも、エレミアに興味を示した。

あの男くさい工房に、こんな可愛げのある女の子がいたなんて。

誰もおどろいた。

そして知らぬ間にうわさは広まって、エレミアの存在はラーゼン中に知れ渡った。

そのお陰で工房にお客が見えてくる日が多くなってきた。

エレミアは商談する客にお茶を出したり、エレミアを目的で寄って

くる

客に笑顔で応じたりもした。時にはクリスに付き添って、彼の汗を拭いてあげたりもした。

難なくこなせて、あっという間に1週間が過ぎ去ろうとした。

そしてとうとう別れの前日である夕ご飯の時間。

食卓テーブルにはエレミアとクリス、エドワードが座っている。

食事を始める前に、エドワードは一週間分の給料と地図をエレミアに渡した。

「それがエレミアの給料だ、もらってくれよな。

それとこれは世界地図だ。必要になるだろうから持って行くとい
い。」

「ありがとうございます！おじさん！」

「礼をいいてーのはこっちのほうだ。はっはっは。それじゃあ、飯
にすっか！」

「うん！いただきますーす！」

みんなは食事を始めた。しかし、クリスは食事がのどに通らないよ
うだ。

なにか考えている様子だ。クリスは席を立ち、場を離れた。

「僕はもういいや……。ごちそうさま。」

エドワードは食事に夢中で気にも留めなかったが、エレミアは氣に
なって仕方なかった。

食事が終わったあと、エレミアはシャワーを浴びた後、寝床につい
た。

再び化粧台の上に飾られている写真立てに目が行って、手にとって

眺めていた。

その時だった。ドアの向こう側に人のいる気配がするのを感じたエレミアは、
去っていかうとするクリスを呼び止めた。

「まって。」

クリスはドアを開けて中に入ってくる。写真を見ていたエレミアに話を始めた。

「そこに写っているの、母さんなんだ。僕がまだ幼い頃に事故で・・・。」

「そうだったの・・・。綺麗な人だね・・・。」

エレミアは感じていた。一週間という短い時間ではあったが、共に生活してゆく中でクリスは次第にエレミアを母親と思うようになったのだ。

エレミアはベッドに座り、クリスと呼んだ。

「こっちに来て、クリス。私は母親にはなれないけれど・・・。」

クリスは涙ぐみながらエレミアのもとへよっていった。

そして、クリスは小さい頃によくしてもらった膝枕で涙を流し、抑えきれない感情で泣き始めた。

エレミアは優しくクリスの頭をなでて言った。

「ずっと私はここにいますからね。クリス。どうかさびしがないで。」

しばらくして、落ち着いたあと、クリスは涙を拭き、
照れくさそうにエレミアに「ありがとう。」とお礼を言った。
彼の心は快晴のようにスッキリとしている。

エレミアは笑顔で返した。クリスは静かにドアをしめて行った。

翌日、エレミアは旅立つ支度を済ませた後、エドワードとクリスに
別れの挨拶をした。

「エドワードおじさん、クリス、いろいろとありがとう。」

「ああ、気にするんじゃないよ。がはは。また来てくれよな。」

いつでも待ってっからな。」

「うん！それじゃあ、またね！」

エドワードとクリスは遠く離れていくエレミアの顔が見えなくなる
まで

手を振って見送った。クリスは長い間、見せなかった本当の笑顔を
表しており、

エドワードがそれに気付いて言った。

「ん？お前、何かあったんか？えらい機嫌がいいじゃねーか。」

「うん。（ありがとう・・・、エレミア。）」

＜第二節＞ 旅支度の一週間（後書き）

【入手したアイテム】

- ・ラーゼンの地図
- ・世界簡略地図
- ・ディアス通貨札

【入手したアーティファクト】

- ・くすねた一枚のビラ

＜第二節＞ 若き羽ばたき

＜第二節＞ 若き羽ばたき

エレミアはしぶしぶ別れを惜しみながらも、目的地である飛行船乗り場へ向かっている。

歩く街の中で人を見つけると、若干目線が気になってしまう。

なぜなら、エドワード工房で看板娘をやったあの日から、

エレミアの知名度は高くなったからだ。彼女は過去のこともあつてか、

有名になることにあまりいい思い出を残したことがない。

今日はなにやら突風が吹いてくる数が多いような気がする。

なんとなくそう思いながら、人が多く出回っている市場通りへ出た。テントを張ってその下で食料品を売ったりする、良く目にする商店だ。

エレミアは飛行船の運賃を遥かに上回った給料で一つの洋ナシを購入した。

食べながら歩き、そして、時々地図をみながら飛行船場へ歩んでいく。

「こんどはヨハネとここで買い物したいな。」

もうすぐヨハネと逢える。そんな気持ちがあったためか、

未来予想図をいつの間にか開いていた。

市場通りを過ぎてゆくと、目の先には荒廃した土地ととげとげしい山が連なった景色が見えてきた。

歩いているエレミアの足を止める一人の男が声をかけてきた。

「おい、その人。その先に行く気かい？」

エレミアは振り返った。そこにはヒゲを生やした緑色のローブを身にまとった

四十歳くらいの男が立っているではないか。腰には長剣を携えている。

男はエレミアに注意を促すために話をした。

「この先はソードマウンテンといって剣のような山が無数に広がっている。

かなり険しいところだ。命を落としかねない。特に用がなければすぐさま引き返すことだ。」

「は、はい……。ありがとうございます。」

「わかってくれて何よりだ。あそこには……。いや、なんでもない。」

最近、妙に突風の吹く時間が長いようだな。嫌な予感がしてならない。

あんたも気をつけたほうがいい。それではな。」

エレミアはあさいお辞儀をした。男は何処かへ去っていった。

もう一度、地図を確認していると、目的の曲がり角より先へ通り過ぎて行ってしまったらしい。

「考え事していたら、行き過ぎちゃったのね。」

来た道を引き返すエレミア。すると、向こう側から何名か白衣を着た科学者が

ぞろぞろと列を作って歩いてくる。その団体は大きな建物の中に入っていた。

建物のガラス窓からは薄暗くて何も見えない。

軽く興味をもったエレミアであったが、すぐに心が入れ替わり、引き続き飛行船場へと歩んでいった。

飛行船場は少々小高い丘の上に作られており、なんども階段を登ることになった。

こういう地形には慣れてないためか、エレミアは息切れを始めた。

「ハア、ハア。こんなに階段があるなんて、さすがに辛くなってきた。」

でももうすぐだから、がんばらなくっちゃ……。」

必死で階段を一段ずつ登ってゆき、ようやく目の前に飛行船場が現れた。

エレミアは飛行船をみて感動した。先ほどの疲れがふっとんだ。

パステル調の空色の飛行船。モチーフはツバメのようである。

エンジン機のようなものは見当たらず、

機体のしっぽからエメラルド色のオーラが生じている。

飛行船は3台到着できるスペースがあり、乗り場は人間の背丈くらいある柵が

しっかりと備わっていたが、すぐ下は崖になっていて、一際危険な場所といえる。

エレミアは近くにあった乗船券売り場でチケットを購入し、

船が到着するまで、隣にある喫茶店に入って一息つくことにした。

椅子に座り、店員が注文を受け付けにやってきた。

エレミアは暖かいカフェオレを注文した。

何分もしないうちにカフェオレがやってきて、エレミアはゆったり気分

カフェオレを飲みながら、のどをうるおした。

そう……。これが彼女にとっての最後の休息になるとも知らずに・

カフェオレを飲み終えたとき、ちょうど良いタイミングで飛行船がやってきた。

エレミアが乗るA機だ。少し急ぎ足でレジに向かい、お会計を済ませる。

喫茶店からでて、そのまま乗り場へ向かった。

目の前には大きな飛行船が。

何人もの乗客が列を作っていた。

高所恐怖症のエレミアは両側の柵にしっかりしがみ付きながら、乗客の列に並んでいった。

「うわぁ……。」

飛行船と乗り場の通路の境目までたどり着いたところに、

乗組員が乗船券のチェックを行っていた。

エレミアは片手で柵をしっかりと掴み、もう一方でチケットを渡した。

「毎度有難うございます。空の旅を満喫ください。」

今の心境で満喫するところではない。早く飛行船に乗ってしまおう。エレミアは飛行船と乗り場通路の境目から覗く地獄の景色に青ざめながらも、

飛行船に飛び乗った。

それから、次から次へと乗客が入ってきて、最後の客が乗り終わり、座席に座った後、乗組員が出航の合図を出した。

「出航します！席を立たないでください。」

飛行船はゆったりと動き出し、少しずつスピードをつけてラーゼンを離れて行った。

<第三節> ディアス帝国

<第三節> ディアス帝国

やっこの思いで飛行船に乗ることが出来たエレミア。ほっと安心したのか、いつのまにか眠ってしまう。

しばらくして目を覚まし、飛行船の窓から景色を眺めた。

そこからは、大きな火山、広い砂漠、そして、紅色に染まった家々が流れ込んできた。

おそらくフラムベルグ大陸に到達したのだろう。

もうすぐだ。そう思い、背伸びをした。

乗組員が乗客たちに連絡する。

「まもなくディアス帝国に到着します。到着時は席をおたちにならないように。」

飛行船はスピードを落とし、ゆっくりとディアス帝国に近づいていた。

エレミアは窓からディアス帝国を見渡した。

国の中央には大きな宮殿があり、それを取り囲むように要塞と思われる建造物が

敷き詰められている。さらにその周りには、先ほど見た紅色の民家が立ち並んでいる。

飛行船は距離をはかり、高度を下げながら旋回して、ゆったりとディアス帝国へ到着した。

「お疲れ様です。ディアス帝国へ到着いたしました。お荷物お忘れ

なく。」

エレミアは飛行船から降りて、ディアス帝国の地に足をつけた。その瞬間、広がる世界が壮大すぎて、頭の中がパンクしそうになった。

深呼吸し、こころを落ち着かせる。

「ふう〜。すごい国……。一週間あっても回りきれないくらいだろうな。」

飛行船場を離れ、紅色に彩る新市街へと歩いていった。好奇心溢れ、小走りで新市街を渡っていた。

しかし、延々に続く街並みにエレミアは疲れて歩みを止めてしまった。

膝に手について息を切らしながら、近くの馬車に目をつけた。黒い車体で黒い馬が二頭つながれている。

エレミアは白髪頭のタキシードを着た運転手に話しかけた。

「あの……。この馬車は乗れますか？」

「ええ、もちろんですとも。ただし、運賃はかかりますが。ご利用されますか？」

「はい。お願いします。」

エレミアは馬車に乗り込んだ。運転手は行き先を聞いてきた。

「どちらに向かわれますか？」

「う〜ん、お買い物がしたいわ。」

「それでしたら、商店街のほうですね。かしこまりました。」

そういうと、運転手は馬車を走らせた。
さすがに馬車のスピードは速く、あっという間に住宅街をぬけていった。

こんどは、中央広場の景色が広がった。

中央には龍にまたがった皇帝のブロンズ像が堂々と立ち誇っており、多くの人間が交差している。

歩いている人を見ると、そのほとんどが国民を守る兵士や、騎士、新米の戦士ばかりである。

街の建物に等間隔でディアス帝国のシンボルと思わせる、赤き龍と剣の紋章が描かれた旗がかけられている。

馬車はそのまま走り続け、ようやく商店街にたどり着いた。

運転手はゆっくり馬車の速度を落として停車した。

「つきましたよ、お客様。こちらが商店街です。

またのご利用をお待ちしております。」

エレミアは降りて商店街を見回しながら言った。

「すごい。こんなにお店があるなんて。」

一日中、ショッピングめぐりといきたいところではあったが、

本来の目的である、漆黒の大地へ行く事を忘れてはいなかった。

とりあえず、フラムベルグ大陸の地図を購入すべく、道具屋さんに寄ってみた。

冒険の必需品ともいえるコンパスや、つるはし、帽子からカバンまでありとあらゆる道具が取り揃えられている。

エレミアは女性の店員に話しかけ、この大陸の地図を購入した。

お店を出た後、早速パッケージの袋を開けて地図を取り出した。紙の刷りあう音をたてながら、折りたたまれた地図を広げる。漆黒の大地はディアス帝国の南にあり、歩いて半日かかるくらいの距離があった。

「こんなに遠いと日が暮れちゃうわ。また馬車に乗っていききたいけど・・・。

でも危険な場所に連れて行ってくれるわけが無いし・・・。
しょうがないや、ここはがんばらなきゃ！」

エレミアは決心した。

もう一度、さっきの道具屋で水と非常食を購入し、
休む間もなく、漆黒の大地へと向かっていったのだった。

＜第三節＞ ディアス帝国（後書き）

【手に入れたアイテム】

- ・ 飲料水
- ・ 非常食
- ・ フラムベルグ大陸地図

＜第四節＞ 消えない想い

＜第四節＞ 消えない想い

馬のひづめが、街の整備された地面のタイルをけって音を出す。

エレミアは城下町の門前まで馬車を利用して移動していた。

門までたどり着くと、賃金を渡して降りた。

目の前に広がる大地。それは、帝国の街中とはうってかわって、柿色の土と、枯れかかった植物、乾燥した空気が漂っていた。

エレミアはこれからきつと大変な遠足になるだろうと思い、気を引き締めた。

体操で軽く足の筋をのばして慣らし、歩き始めた。

ちょうど春を迎えるこの季節。

しかし、この地域はラーゼンとは違い、少し暑いくらいだ。

土の色といい、植物の花といい、まるで紅き龍の背中のようなのである。5分が経過したところで、エレミアはのどの渇きが気になり、すこし水を飲んだ。

何事も考えずに、ただひたすら歩いてゆく。

さて、何時間がたったのだろうか。固い意志を持っていたエレミアであったが、

あまりにも環境の厳しさに、挫折しそうである。

途中で見つけた木の枝を杖代わりに、フラフラの体を一生懸命支えながら、

前に突き進んでいった。

しかし、とうとう彼女は疲れ果てて歩みを止めてしまった。

「ちょっと休もう・・・。」

エレミアは偶然にも岩山を見つけ、その穴ぐらのなかで涼しんだ。ちよーどお腹もすいてきて、買ってあった非常食をとりだして食べ始めた。

ジャガイモのなかに炒められた肉と野菜がミックスされたようなものである。

口の中がパサパサになり、非常食を傍らに置いて、ポシエツトから水を取り出した。

水で食べ物を流し込んだ後、もう一度非常食を手に取りろうとしたとき、

非常食は忽然と姿を消してしまった。

「あれ?・・・ない!」

エレミアは周辺を探した。しかし、見当たらない。

自分ひとりしかないのになくなるなんてあり得ない。

パクパク、ムシヤムシヤ

岩山の外で音がする。

エレミアは穴ぐらからでてみると・・・、

そこには非常食をむさぼる一匹のラクダがいるではないか。

「わたしの食べ物がー!このー!どろぼーう!」

良く見てみると、そのラクダには大きな荷物が積まれてあった。

エレミアの怒りの声によって飼い主が気付いて戻ってきた。

「アワワワ・・・こらっ!タヌちゃん!なんて事を・・・。」

「あなたは・・・？」

「アラララ・・・、すみませんね。少し目を離している隙に・・・。
私はですね、通りすがりの商人といっておきましょうか。」

商人は少し小太りで、見るからに怪しげなアラビアン風の男だ。

エレミアは不思議がって質問しようとする、むこうも質問がかぶってしまった。

「なんで商人さんがこんなところで？」

「それにしても一人でどうしてこんなところに？」

商人は手を揉みながら、答えはじめた。

「はい、実はですね、少しキケンな商売をしておりますね。

漆黒の大地にちょっと用事があるんですよ。へへへ。

詳しいことまでは教えられませんかね・・・。

あなたは一体・・・？」

「わたしも同じところへ行くつもりだったの。

最後の決戦をみにいくの。」

「そうだったのですか！奇遇ですね。

ヤジウマってやつですかね・・・？シシシ。

そうだ、先ほどのお詫びといえますか、タヌちゃんに乗って行きませんか？」

「いいの？」

「はあい。これからもう少しありますからね。

それに人様の物を勝手に盗んだままじゃ、商売根性が許せませんからねえ。」

「やったー！」

エレミアはラクダのタヌちゃんに乗せてもらい、岩山を後にした。

あっという間に日は沈み、お月様が顔を覗かせた頃、
ようやく漆黒の大地に到着した。

月の光がまぶしいくらいに辺りを照らしている。

漆黒の大地……。大地は荒れ果て、毒々しい植物が生えており、
はだかの木々は朽ち果てていった過去の歴史を物語っている。

エレミアはタヌちゃんから降りた。商人と一緒にもう少し先へ歩いて
いてみた。

ここは人が来る場所ではない。五感で感じずともわかる。

カキーン！！！！

剣の音がして、二人は足を止め、急いで枯れた大木に身を隠した。
エレミアと商人はそっと音のするほうを覗き見た。

するとそこには、勇敢に戦う英雄ケテルと黒いローブの男がいるで
はないか！

両者ともにらみ合っている……。

（ヨハネ！やっと思つた！でもなんであんな服装に……。

まあいいや、早くへんな黒いやつを倒して一緒に帰ろつと！）

エレミアはもういちど大木に身を隠し、タイミングを見図って出て
行こうと思った。

ドスンッ

一緒に隠れていた商人の肩にぶつかってしまった。

ごめんなさいと言おうと顔をみると、
なんと！商人の体から無数のキノコが生えているではないか！
商人はガチガチに固まって呼吸も止まっており、重たい体がエレミアの方に倒れてきた。

エレミアは避けて思わず声を上げてしまった！

「キャアアアア！」

その悲鳴で戦いの最中である二人はエレミアの存在に気付いてしまった！

二人の前に姿を現してしまったエレミアは棒立ちしている。

ケテルはエレミアの姿をみて言った。

「な・・・っ！なぜこんなところに女が・・・?!」

滅亡の使者である黒いローブ姿の男から声がする。

「貴様・・・、仲間がいたのか・・・。

まあよい、人間ごとき一匹増えたところで、なんら変わりはないのだからな・・・。」

滅亡の使者はケテルに襲いかかった！

毒々しい紫の両腕を伸ばし、鋭いカギ爪でケテルの首をとろうとした！

だが、ケテルは七星剣でその攻撃を防御する！

剣と紫の両手が強く押し合っている！

ケテルは必死におさえつつ、声を発した。

「どうしてこんなところに来たのだ！女っ！早く逃げるんだ！！
今ならまだ間に合う！さあ！早く！」

一瞬、あの時の記憶が蘇ってしまった。

エレミアは二度とあのような体験を味わいたくなかった。

「やつ、やだ！もうヨハネに離れたくない！私も戦う！」

エレミアは飛び出して、念動力で滅亡の使者の両腕をはじき飛ばした！

滅亡の使者は三人分の間隔ほど後ろに下がって間合を取った。

エレミアはケテルの少し前でかばうように立っている。

「ほう……。それなりに力のある人間ではないか。

それに我の瘴気をもつともしない。

常人ならば地獄のキノコに食い尽くされているところなのだが……。

今までに見たことの無い能力。面白い。

だが……。ケテルよ。貴様の仲間ではないのか？」

ケテルは脂汗をかいて、エレミアを見ながら言った。

「違う！彼女には手を出すんじゃない！

早く逃げるんだ！私はヨハネではない。人違いだ！」

人違い……。？確かに声も違うし、年も違う。

エレミアはケテルの姿を良く見て、少しずつ自分の思い込みに気付いていった。

そんなこともお構い無しに、滅亡の使者は再び攻撃を試みた！

滅亡の使者は体から黒い霧をふきだした！

その霧は辺りの花や小動物たちを一瞬にしてゾンビのようにカラカ

ラにしてみました！

それを見て危険と察知したエレミアは念動力の壁を作り出し、自分とケテルを黒い霧から身を守った。

不気味な笑い方をしながら、滅亡の使者は言った。

「クククク……。器用な奴だ。

これまでに無い手ごたえを感じる。普通に殺すだけでは勿体無いな。

これはどうだろう……。？さあ、苦しみを味わうがいい……。」

滅亡の使者はエレミアの目の前に寄って来た！

だが、攻撃してくるような素振りはない。

ローブのフードをかぶっているが、その中には顔が無く、真っ黒である。

エレミアは念動力の壁を張り続けながら、滅亡の使者の威圧感を感じ、

すこし身を引いた。

その途端、ケテルが大声を放った。

「女っ！奴の顔を見るな！！」

もう遅かった。

エレミアは不思議に滅亡の使者の真っ黒い顔に釘付けになってしまっていた。

見続けていくうちに、一瞬、鏡のような光を発し……。なんと……。ヨハネの顔が闇から現れたのだ……。

エレミアはヨハネの顔を見ると頭の中が混乱してしまった。

「どうして……。？どうして滅亡の使者が……。ヨハネ……。？」

念動力が弱まってくる。

滅亡の使者はそれをチャンスに、ナイフのような鋭い爪でエレミアの体を貫いた！

グサツ！！！！

混乱が解けたあと、ハツとして目の前を見た。

そこには、腕で体を貫かれているケテルの姿が・・・。
エレミアをかばったのだ。

「そ・・・、そんな・・・。」

ケテルは口から血を流しながらも、滅亡の使者の腕を必死に掴んでいる。

そして、大きな声で叫びながら、七星剣を握っている腕に力を込めた！

「うおー！！！！！！」

ケテルは七星剣で滅亡の使者の心臓をめがけて突き刺した！
滅亡の使者は絶叫した！

「ぐあああああああ！！！！」

滅亡の使者は何歩かのけぞってゆき、
立ち止まり、両手を挙げて黒い煙を放ちながら爆発した！

さらに、その中から暗い紫色の魂のようなものが8つ飛び出して、
彷徨うように上空で旋回した後、

魂たちは四方八方へと飛び去って行った・・・。

深手を負い、倒れるケテル。

エレミアは急いでそばへ駆け寄って座り、名を呼び続けた。

「ケテル！しっかりして！ひどい怪我……。」

どうしようもない状況で、エレミアは涙を流し始めた。

虫の息であるケテルは、わずかに残っている意識を保ち、かすれた声で伝えるべきことを口にした。

「女……。無事か……。よかった……。」

よく聞いてくれ……。

滅亡の使者は完全に消滅していない……。

奴は分裂してしまった……。

だが……。まだ希望はある……。

完全体にならないうちに……。倒すのだ……。

これを……。」

そう言うと、ケテルは七星剣をエレミアに託した……。意識が朦朧とするなかで、ケテルは続けて伝える。

「この七星剣を……。皇帝ディアスに見せるのだ。

力になってくれるだろう……。」

あとは……。た……。のむ……。」

全てを伝え終わったあと、ケテルの体が光だし、完全に真っ白い光となり、天に召されるように消えていった。

エレミアは二度もヨハネを失ってしまったかのような感覚が頭の中を渦巻いた。

「私のせいで・・・、私のせいでケテルさんを死なせてしまった・・・。」

悲しみに浸って座り込もうかと思った。

だけれども、そんなことをしても何も始まらない。

涙を拭いて意識をしっかりと持つエレミア。

ヨハネも持っていた、七星剣を見つめながら、心に誓った。

「決めた！私、ケテルさんの死を無駄にはしないわ！
必ず、滅亡の使者の分身を倒して見せる！」

七星剣を握り締めていると、なぜかヨハネが近くにいるような
そんな感じがして、エレミアの心は落ち着いた。

「ヨハネ・・・。私と一緒にいるんだね・・・。
わたし・・・、がんばるからね・・・！」

＜第四節＞ 消えない想い（後書き）

【手に入れたアーティファクト】

- ・七星剣

【消費したアイテム】

- ・飲料水 ・非常食

【手に入れたアイテム】

- ・奈落茸

＜第一節＞ 難解な誤解

＜第一節＞ 難解な誤解

エレミアは七星剣を抱きしめながら、ケテルの意志を継いで、滅亡の使者の分身を倒すことを決意していた。

静寂に包まれていた漆黒の大地。突然、男の大きな声が轟いた。

「ケテル様ぁー！ー！！」

行き成りどこからか一人の男性が飛び出してきた。

どこかの部族だろうか。インディアン風の格好をしている。

エレミアは声にビックリしてその場から離れようとした。

「キャアアー！」

「まて！貴様！逃さんぞー！」

追いかけられるエレミア。懸命に逃げるが、男の足は速くて捕まえられそうだ。

何とか振り切ろうと、お得意の超能力「サイコウェーブ」で男を吹っ飛ばした。

力の調節ができていなかったためか、男は3メートルほど激しく吹っ飛んで、

地面に叩きつけられた。

これでなんとか切り抜けられる！
だが、そう甘くはなかった。

前方からさっきの男の仲間であろう者達が2名、行く手を阻む。右や左へ逃げようと思いきや、そこからも追っ手がやってきた。そしてとうとう、取り囲まれてしまい、ピンチに追い込まれた。

先ほどの吹っ飛ばされた男が、仲間らの輪の中をはいくぐって、エレミアの真正面に立った。おそらくこの男は部族長なのであろう。エレミアは部族たちの鋭く睨む目線で硬直してしまう。部族長は怒りに満ちた形相で質問した。

「貴様・・・、ケテル様に何をした・・・？」
「・・・・・・・・」

答えを返そうにも、恐怖のあまり言葉が出ない。

部族長はエレミアの持っている七星剣を目にして、顔をさらにくしゃくしゃにして怒りが込みあがった！

「それは七星剣！貴様・・・やはりケテル様を・・・。よくうも・・・！！！」

部族長は腰につけていた剣を抜き、それにあわせて取り囲んでいる部族らは

手に石を持って今にも投げつけてきそうな体制になる。

部族長は大声で叫んだ！

「ケテル様の仇いー！ー！！」
「キャー！ー！ー！！」

もはや絶体絶命か・・・？！
うずくまり、両手で頭を押さえ込むエレミア。

だが、急にその場の音はプツンと消え去った。

恐る恐る、ゆっくりと顔を上げて見てみると、立ったまま気を失っている部族長の姿が。

取り囲んでいた仲間たちも体をダランとさせて、目がうつろになったまま、棒立ちしている。

エレミアは立ち上がって、今の状況に疑問を抱いた。

「な、なに？何が起こっているの？」

部族の体をつついて確認しても、うんともすんともない。

「その人・・・、今のうちにこっちに・・・。」

エレミアを呼ぶ少年の声がする。

そのほうへ振り向くと、そこには陰陽師服を着た男の子がいるではないか。

みるからして14歳くらいだろうか。

男の子はエレミアの手を引っ張って、一緒に走ってその場を離れていく。

エレミアは状況がつかめず、走りながら男の子に質問した。

「いったいどうなってるの？ハア、ハア、君はいったい・・・？」

「僕の幻術で幻覚を見ているんです。」

話は後です、術が解けないうちに早く逃げましょう。」

どこへ行くこうと言うのだろう。とにかく今はこの少年を信じるしかない。

黙々と走ってっていると、だんだん、潮の香りがやって来た。生命の吹き込まれた大地、ところどころに咲く青い花が見られ、

やがて海岸が見えてきた。

海には一艘の船がとめられている。

少年が船に乗っている運転手に声をかける。

「もどりました！」

「若様、今はしごを下ろします！」

ガラガラと音を立てながら、はしごが下ろされた。

少年はエレミアに言った。

「さあ、船に乗ってください。一旦この国を離れましょう。」
「わ、わかったわ。」

二人ははしごを上ってゆく。少年はひよいひよいと登っていったが、エレミアにとっては苦行であった。

一段、また一段とゆっくりかつ慎重にのぼっていき、なんとか船に乗り込んだ。

中は温かみのある木でできている。

赤で塗装された船体は、まるで神社の建物を連想させてくれる。

エレミアと少年が船室に入ると、それを確認した運転手は、錨を上げて船を出した。

船は静かな波をきりわけながら、フラムベルグ大陸を離れていった。

＜第二節＞ 安息の月

＜第二節＞ 安息の月

ゆりかごのように静かに揺れながら、船は何処かへ向かっている。
エレミアと少年は船室の中で椅子にすわって会話している。

「さっきはありがとう。どうなるかと思っちゃった……。」

「いいえ。無事でよかった。声が聞きとれていなければ助けられなかった。」

自己紹介がまだでしたね。私は安倍夢人といいます。よろしくです。」

「わたしはエレミアっていうの。よろしくね!……ん?」

エレミアは夢人の顔を見ると、何処かであったことがあるなど頭の中で引っかかっていた。

しかし、それほど深く記憶を探る必要もなく、すぐに思い出してしまった。

「あっ!」

「どうか、しましたか?」

「う、ううん、なにも……。」

エレミアは思わず声を発してしまったが、口には出さなかった。

なぜなら、滅亡の使者になってしまった悲劇の中学生「安倍神一」にうりふたつだったからだ。

神一の先祖に当たる人物なのであろうか。

見たところでは、邪悪な気配は感じない。むしろ、その逆の立場である光を発している。

エレミアは神一のことから頭を離そうと、話題を考えて会話をはじめた。

「夢人くんはあそこで何をしていたの？」

「僕は英雄ケテルの手助けをしようと接近を試みました。

しかし、滅亡の使者の瘴気には近づけなかった……」

「そうだったのね……」

何も出来ない悔しさに唇をかみしめた。

表情をおちつかせ、エレミアに質問する。

「エレミアさんは一体……？」

「私も助けようと入っていったけど、逆に守られてしまって、ケテルさんは身代わりになって死んでしまったの……」

「なるほど……。それで部族たちが誤解してエレミアさんを襲ったわけですね……」

「とんでもないことになってしまった……」

暗い表情を見せるエレミア。それを見た夢人は慰める。

「もう起きてしまったことは仕方が無いですよ。

それに、これは何かの運命かもしれませんし、

エレミアさんの行動には何らかの意味が必ずあるはずですから。」

「ありがとう……。ちょっと気が楽になったよ。」

エレミアは七星剣をテーブルの上において、死に際に残したケテルの言葉を夢人に話した。

「そうですか……。滅亡の使者が分裂してしまったのですね。」

夢人はエレミアの気持ちを和ませるために、少し笑顔を作った。

「僕に出来ることがあれば、手伝います。

一緒に世界を守りましょう。」

「ありがとうございます。とつてもたすかるよ。」

硬直していたエレミアの顔にも笑顔がようやく戻ってきた。

話が一段落したところで、運転手が室内にやってきて声をかけた。

「若様、もうすぐ着きます。」

「わかりました。エレミアさん、今晚、私の家で泊まっていってください。」

「うん！」

エレミアは船室をでて、甲板に立った。

ゆったりとなびく風にあたりながら、近寄ってくる島を眺めていた。あとから夢人も後ろからやって来た。

「あの島は龍星島といいます。あそこに私の住んでいる星安郷があります。」

玄関ともいえる国、ジエパンは外部の人間を簡単には入国させてくれません。

なので、星安郷に通じる隠し洞くつをくぐって行きます。内緒ですからね。ふふふ。」

自然と波が船を島へと運んでいった。

あくびをするうちに、いつの間にか隠し洞くつの手前まで着いていた。

しかし、ここが入り口というものの、何度見てもただの大岩に変わりはない。

夢人は人差し指と中指を立てて並べ、口元に近づけて呪文を唱え始めた。

すると、大岩に船が入るくらいの穴が現れて、洞くつが見えてきた。船は洞くつ内部に入り込み、ある程度すすんだところで術を解いた。何事も無かったかのように、洞くつの入り口は塞がれ、もとの大岩にもどった。

小波に揺られながら、目先に見える船着場へ吸い込まれるように進んでゆく。

薄暗い洞くつ内部に二本のタイマツが辺りを照らしている。

船は到着し、梯子が下ろされた。

皆は船から降りて屋敷に伝わる通路を渡ってゆく。

星安郷。そこはまるで、神社の広い境内のようで、

いくつも屋敷が建てられており、匠の腕によって美しく整えられた庭が広がっている。

安倍家の親族やその友人、観光客がここで羽を休めている。

船の運転手はおやすみなさいと挨拶をして二人と別れた。

夢人はエレミアを二階の寝室へ案内した。

ふすまを開けて中に入った。暗い部屋を明かりのスイッチで一挙に灯す。

目の前はぽわっと和風の内装が広がった。

「こちらでお休みになってください。

ベッドじゃないのでちょっと慣れないかもしれませんが・・・。」

「ううん、ありがとう。」

グウ。

「安心したらなんだかお腹がすいちゃった。えへへ。」

「大変でしたからね。すぐに食事を持ってこさせます。

ゆっくり休んでくださいね。」

「うん！」

夢人は部屋からでて、静かにふすまを閉めて出て行った。

それから何分も立たないうちに、食事が運ばれてきた。

なんだか旅館に泊まりに来たような優雅な気分である。

思い切り動かした体は、一人で食べきれない程の料理を吸い込むかのように

たやすくだいらげてしまった。

食事が終わり、ふと、窓辺のほうをみてみた。月の光が差し込んでいる。

エレミアは月光に魅了され、ベランダに出て行った。

お月様の方をみると、そこにはうっすらと双子の山が顔を出していた。

美しい光景に感動しながら、エレミアは心の中で思った。

「ヨハネも同じお月様をみているのかな・・・。」

再び逢えることの出来る保障など考えず、エレミアは必ず逢えると信じている。

夢が夢だけで終わらぬように、また、押さえ込まれる現実に関われず、

夢を見続ける思いによって、新しい明日を作り出し、

前へ進んでいく心を常に忘れないようにと、もう一人の自分に言い聞かせていた。

＜第三節＞ 星安郷

＜第三節＞ 星安郷

明くる次の日、早くから目を覚まし、ベランダに出て深呼吸をしている。

二階から見えていた、ふたごの山は深い霧に包まれていた。

エレミアは少しこの屋敷を探索しようと部屋を出た。

ぴかぴかに磨かれた渡り廊下を歩き、

高そうなツボが置いてある大広間に心を打たれながら通り過ぎていった。

てきとうに歩きまわっているうちに、星の印が描かれた扉を見つける。

わずかな魔力を感じたエレミアは、あふれんばかりの好奇心で部屋に入ろうと扉を開ける。

そっとなに入ると、そこは薄暗く、たたみ二十畳くらいの広さがある。

中央にまたもや、紅い星の印が描かれており、

5つの頂点に足の長い燭壇にロウソクがたてられてあった。

壁の収納棚には、紙でできた人形や数珠、書物などが無造作に並べられている。

それらに見とれていると、誰かがそっと後ろからやってきて、エレミアの背中をたたいた。

「キーンッ!!」

身震いを起こし、鳥肌をたてて叫んでしまった。
なんだ、良く見ると夢人ではないか。

「あゝ、びっくりした。お化けかと思っちゃったよ。」

「すみません、おどろかせてしまったようです。」

「ううん。しかし・・・ここは一体？」

「ここは儀式の間といって、悪魔祓いや術式を行う場所なんですよ。」

「そうなんだ・・・。あ、わたしに何か用事でもあったの？」

「そうでした、朝食の準備ができたので、一緒にどうかと思いましたが。」

「いいね、いこっ！」

二人は朝食のために大広間へ向かっていった。

大広間の広いテーブルの上には食事が既に並べられていた。
運転手である六助もそこに座っていた。

昨日の夕ご飯とは違ってかわって、炊き込みご飯と味噌汁、
魚の塩焼きという質素な料理であった。

しかし、満腹さが残っていた為か、落ち着いた食事になっていて
ちょうどよかった。

エレミアは少し急いで、みんなより先に食事を終えた。

箸ですくったご飯を口に持っていく夢人にエレミアは話しかけた。

「そろそろ出発したいわ。」

「わかりました。」

少々せっかちなエレミアを見て、夢人は責任感が強い人なんだと感じた。

この人なら必ず、滅亡の使者を倒してくれるだろう。そうに違いないと信じた。

みんなの食事が終わり、出発の準備を済ませた後、エレミアは七星剣を鞘に収めて屋敷を出る。

さざなみの音がする隠し洞窟に入る。

夢人が行き先を伝えると、船はディアス帝国へ向かって泳ぎだした。

船室のなかで、エレミアは皇帝がどんな人なのだろうかと、勝手に妄想している。

考えているエレミアの顔を見て夢人は言う。

「大丈夫ですよ。陛下はとても優しい、まるで父親のようなお方です。」

すぐに仲良くなれますよ。」

「そっか。たのしみだね。」

にこにこしながら、着陸をまっていた。

船は龍星島をぐるりとまわり、島が見えなくなった。

今度はフラムベルグ大陸が近づいてくる。

あの、朽ちた大地を過ぎてゆき、フラムベルグともう一つの大陸をつなぐ

大きな橋をくぐっていった。

二人は船外に出て、大橋を眺めた。夢人は指差して説明した。

「この橋は運命の橋と言われていて、過去に世界大戦がまだあった頃、

ここが戦の場となっていたようです。」

エレミアはくぐっていく橋を見上げながら、あまりにもの大きさであっけに取られていた。

大橋を通り越して、北へ方向転換する。船は休むことなく進んでいた。

少しばかり、高波が気になってきた。六助は海の様子が変わりを感じた。

ふと、南の空をみると、身の毛もよだつ黒い雲がおとなしい海を包んでいた。

六助は二人を不安にさせまいと、何も言わずそのまま船を走らせた。

「少し気になるが・・・、まあ、こっちに来ることは無いだろう・・・。」

しかし何かが起こりそうだ・・・。」

船室でくつろいでいる二人。長い航海でさすがに退屈していた。こくこくと眠り始めそうになった時、六助が声をかけてきた。

「もうすぐ帝国につきます。」

エレミアはその声を聞いたとたん、眠気は吹っ飛び、船外に飛び出していった。

夢人もつられて起きて甲板に出て行った。

「港から入っていけば、ケテルの部族に襲われることは無いでしょう。」

徐々に帝国の港が近づいてくる。

大きく汽笛を鳴らす大型の豪華客船や、世界各地へと冒険者を乗せてゆく

見慣れた旅客船が数席並んでいた。

ようやく、港の縁に到着し、船はとまった。

みんなは船から降りていくと、一人の海兵がやって来て、入国証明のパスポートを六助に求めた。

「これはこれは安倍様。いつぞやはお世話になりました。

こちらの女性はどちら様で？」

夢人が笑顔で答えた。

「僕の友達です。」

「そうでしたか。よろしくお願いしますね。

それでは確認しましたので、失礼致します。」

そういつて、敬礼すると瞬きする間もなく次の仕事へ飛んでいった。

夢人は一時のお別れの挨拶をした。

「ここで少しの間、お別れですね。」

「うん。夢人くん、六助さん、いろいろありがとう。とても感謝しているよ。」

「困った時はお互い様ですよ。また何かあったら、来てくださいね。」

「うん！」

エレミアは二人と握手を交わして、宮殿へと向かっていくのであった。

<第四節> 火龍の皇帝

<第四節> 火龍の皇帝

ディアス一世ブロンズ像。帝国新市街中央広場に堂々と鎮座する。エレミアは目的の宮殿へ向かっている最中である。

街の人間とは身なりが異なるためか、若干、人の視線が気になる。広いまっすぐな街路をたどってゆくうちに、次第と街の様子が要塞へと変わってゆく。

この区域は旧市街であり、世界大戦があった頃、街は要塞へと改築された。

今はその戦争の爪あとを残したまま、旧市街として兵士や騎士の住み処となっている。

旧市街を駆け抜けて行くエレミアを、柄の悪い戦士達が見つけ、ニヤつきながら仲間同士で合図する。

先回りをしてエレミアの行く手を阻んだ。

「キャッ！い、一体なんの用？！」

「見たことのある服装だなあ、おじょうちゃん。」

「俺たちとちっと付き合ってくれんかの？うしし。」

鼻の下を伸ばしながら、エレミアの体に触れようとした。そのいやらしい手つきを叩き落した。

「このヘンタイっ！」

エレミアは催眠術で柄の悪い連中を眠らせようと試みた。

しかし、奴らは平気な顔をしているではないか。

「何かしたか？とにかく付き合えよ！変なことはしねーからさ！」

無理やりエレミアの腕を掴んで引っ張った！

「痛い！離してよっ！」

さすがに鍛えられた男の筋力には勝てない。

このまま何処かに連れ去られてしまうのだろうか・・・？
声に出して叫ぼうとしたその時である。

「何をしている！貴様ら！」

宮殿の方角から一人の若い騎士が駆け寄ってくる。

何十メートルもの遠方からやってくるのかと思えば、

瞬きをしているうちに、いつの間にか目の前に立っているではないか。

さらに若い騎士は目に見えぬほどの速さで細剣を抜いて、
腕を掴んでいる男の首を捕らえた。

「彼女からその手を離したまえ。」

突きつけられた銀色の閃光を見て、思わずつばを飲み込んだ。

無言のまま、即座に掴んでいた腕を離し、柄の悪い連中はあつという間に

何処かへ去っていった。

華麗に剣をおさめる姿を見ながら、エレミアはお礼を言った。

「ふう……。ありがとう、助かりました。」

「お怪我はありませんか？」

「はい。」

「よかった。まったく……。やつらの品の無さには呆れてしまう。
帝国の面汚しめ……。」

眉間にしわを寄せながら頭を押さえた。

若き騎士は自己紹介をした。

「私の名はラインハルトと申します。帝国の神殿騎士です。」

「わたしはエレミアといいます。」

「エレミアさんですか。お美しい名前ですね。」

そうそう。先ほどなにやら魔法を使っておられたようですが、
奴らは信仰心が無いために、効き辛いのかと思われ……。ん……
？」

ラインハルトはエレミアの持つ七星剣に気がついて

途中で話をやめて重大な事実気付いた。

「それは……。七星剣……。まさか、英雄が……。!?」

エレミアは七星剣を両手に乗せて見せながら、

悲しげな表情で真実を述べた。

「そうであったか……。」

だがしかし、悲しんでいる場合ではない。

今すぐ陛下に逢わせましょう。さあ、こちらへ。」

ラインハルトはエレミアを婚約者のようにエスコートして、
宮殿へと向かっていった。

宮殿のエントランス。紅の大理石が一面に広がり、床にはあの紅き龍と剣の紋章が織りあらわされた踏み絵がある。

ラインハルトは面識の許可を得るために、その場を離れた。

待たされるのかと思いきや、重大な用件のためか、最優先された。

「エレミアさん、参りましょうか。」

エレミアは心臓をドキドキさせながら、真紅のカーペットの道を歩んでいった。

もしかしたら、ケテルを死なせた罪に問われて牢屋に閉じ込められてしまうのではないだろうか……。そんな不安が募る。

考えているうちに、巨大な二匹の龍が彫られた扉の前に来ていた。ラインハルトは扉を開いた。

玉座の間には数名の神殿騎士が槍を持って、玉座への道を護っている。

足を踏み入れた瞬間、奥の方から熱い気迫のオーラが押し寄せてくる。

一瞬、体をのけぞってしまった。

一歩ずつ、丁寧さと謙虚さを乱さないように前へ進んでゆく。

玉座の前までたどり着いた。

そこには、幾度にわたる激戦を乗り越え、永劫の地を築きあげた皇帝の姿が。

龍の刻まれた赤銅の鎧、雄々しき紅き髪、灼熱の眼差し。

まさに、紅き火龍そのものである。

玉座のすぐ手前には皇帝の息子と思われる青年が立っている。

子息はまるで太陽のような印象を思わせてくれる。

ラインハルトはエレミアを紹介した。

「陛下、こちらがエレミアさんです。」

「・・・。ご苦労であった。もう下がってよい。」

「はい。失礼致します。」

一礼をしてその場を去っていった。

皇帝は堅苦しい表情を解いて、自己紹介した。

「私の名はディアスと言う。帝国の3代目にあたる。」

この若いほうは我が子、ノアだ。次期に後継者となる。」

ノアは甘いマスクで少し頼りなさそうな感じた。

しかし、彼からは輝かしい太陽のまぶしさを発している。

お辞儀をして挨拶をする。

「ノアです。以後、お見知りおきを。」

緊張する中、ディアスは気遣って話を進めていった。

「楽にしてよい。」

話はラインハルトから聞いた。

さぞ、大変であつたろう・・・。」

「は、はい・・・。」

エレミアは丁重に七星剣を渡して言った。

「ケテルさんが陛下にと……。」

「七星剣か……。彼の心ともいえる神器……。」

ディアスは七星剣を鞘から抜いて掲げて見た。

目線をそらしたまま、エレミアは自分の罪について話す。

「わたしはケテルさんを殺してしまったのも同然です。
なので、どんな罰でも受けます……。」

静かに七星剣をおさめるディアス。

目をつむって、2、3秒、間をあげたあと、話を始めた。

「英雄ケテルは仲の良い戦友であった。

血は違えど、兄弟のように親しんでいた。

過去の戦も彼と共に乗り越えてきた。」

ますますエレミアは言葉を失ってしまった。

しかし、ディアスは彼女の暗い心を明るく灯す。

「安心したまえ。私はそなたを罪に問うことはない。

なぜなら、彼はわが身を犠牲にする覚悟で、滅亡の使者に挑んだ
のだからな。

それでも自分自身、許すことが出来ないのであれば、

責任を持って滅亡の使者の分身とやらを倒し、終始をつけるが良
い。」

この言葉を聞いたとたん、足かせが外れたかのように、重たい気は
消え去った。

そして、エレミアは感謝して気持ちを打ち明ける。

「有難うございます。」

私はケテルさんを死なせてしまった責任もあるし、命を救ってくれた恩返しとしても、必ず滅亡の使者を倒して平和を取り戻します。」

「そうか！良くぞ言ってくれた！

私も協力するぞ！共にこの世界を救おう！」

みんなは笑顔になり、お互いに握手を交わした。

それを見ていた周辺の騎士たちは、近くに寄って来て拍手をしてその場を盛り上げた。

場が落ち着いた後、ディアスは夕方の食事に誘う。

それと同時にメイドを呼んで、個室を用意するように命令した。

エレミアは感激した。小さい頃、童話をよんでずっと夢見てきた貴族の生活。

それが叶った瞬間であった。

＜第五節＞ 世界の幕開け

＜第五節＞ 世界の幕開け

メイドはエレミアを個室へと案内した。

扉を開けると、落ち着きのある薔薇の香りがやってきた。

その香りに誘われるかのように、部屋に入っていた。

かわいらしい花の模様であわせられた家具や壁紙が心を和ませてくれる。

メイドはクローゼットから貴族服を持ち出して言った。

「お着替えいたしませんか？」

かわいいげなピンク色のドレスを見て、エレミアは喜んだ。

着替えを手伝ってもらい、貴族のお嬢様にはやがわり。

鏡にうつる自分の姿に見とれてしまう。

「とてもお似合いですよ。」

「ありがとう。」

浮かれているエレミアにメイドは

「食事の準備ができ次第、声をかけます。」と言い、部屋を離れていった。

エレミアはふわふわのベッドに勢いよく寝転んだ。

まるでネコのようにもぐりこんで、肌触りのよい毛布にじやれる。そのまま寝てしまおうと仮眠をとった。

「エレミア、エレミア。」

誰かが名前を呼びながら、肩を揺らす。
だれだろうと目を開けると、そこにはヨハネがいるではないか。
エレミアは思わずぎゅっと抱きしめた。

「ヨハネ！ 逢いたかった……。」

「ただいま。ごめんね、エレミア。今までずっとそばにいれなくて……。」

「ううん、いいの。でも……、もう離れないでね。」

もう……、どこにも行かないで……。」

「わかった。約束するよ。二度と離さないようにこうして手を握っているよ。」

ヨハネの手のぬくもりによって愛を感じる。

見詰め合う二人。キスをしようと、抱きしめあっている体を離す。

その時、ヨハネの姿に異変を感じてしまった。

なぜかメイド服を着ているではないか。

気のせいだと目をこすって再び確認する。

すると、さらにヨハネの姿が変わり、こんどは髪の毛が真っ白に染まってしまった。

「えーっ!？」

エレミアはわけもわからないまま、固まってしまった。

ヨハネはエレミアの肩を揺さぶって、「どうした？ エレミア？」と声をかけ続ける。

「エレミア様、エレミア様。」

呼びかけるメイド。エレミアは寝ぼけ眼で体をゆっくりと起き上がらせる。

「なんだ・・・、ゆめだったのね・・・。」

がっかりしたエレミアの様子にメイドは気になりながらも、広間へ案内するのであった。

すっかりと空は紺色に塗り替えられ、夜となっていた。

輝きだす星空が見え始めた頃、天井に描かれた壁画の広間で夕食が始まった。

純白のテーブルには豪華な料理がずらりと並び、

各席には皇帝の知人であろう人物が何名か座っていた。

テーブルの中央にディアス、その隣に妻のスカーレットとノアが座っている。

ディアスは食事の前に話を始める。

「皆、聞いてくれ。」

皆はディアスに注目した。

「先ほども話した通り、英雄ケテルは旅立たれてしまった。

彼の存在はなにもにも代え難い・・・。

しかし、いつまでも我々は下を向いているわけにもいかないのだ。我々のために犠牲となった英雄ケテルの意志を受け継ぎ、

この世界を救うために、協力し合い、滅亡の使者を討ち滅ぼすのだ。

長い戦いの幕開けとして、皆で乾杯しよう。」

それぞれのグラスに酒が注がれる。

全てにいきわたったとき、皆はグラスを手に取り、
ディアスは「乾杯。」といって一口飲んだ。その後にあわせて皆も
酒を飲んだ。

それからいつもの食事が始まり、なだらかなムードが広がった。
目移りする料理にはどれも高級食材が使われているものばかり。
ディアスは食事に夢中なエレミアに仲間を紹介する。

ハンサムな將軍リチャード。彼は物心ついたときから戦いの運命に
立たされ、
天性の才能によって24歳という若さで將軍に昇格した。

研究長グラム。帝国直属の科学研組組織『グングニール』のちよつ
と陰気な研究長。

彼は数名の部下と共に、科学や魔道に関する研究を行っている。
あの突風が吹き荒れる街、ラーゼンとの空路を行き来する飛行船の
開発にも協力した。

そして最後に、一際静寂さをかもし出す宮廷星占術士ダアト。
過去に渡る幾多の戦の勝利は、彼の導きによって得られたと言つて
も過言ではない。

みなは快くエレミアを歓迎した。

まるで、家族の一員かのように、慣れ親しんで雑談も交わした。

エレミアがそろそろ食事に飽きを感じてきた時に、
ディアスが滅亡の使者の話を持ちかけた。

「しかし、エレミア君の言うとおり、滅亡の使者は分裂して世界のあちこちに散らばったというが・・・、どう探して良いのやら・・・。」

皆は考え込んだ。その中で研究長のグラムが何かを思い出して語った。

「そういえば・・・。」

「なにか、いい策はあるのか？」

「そうではないのですが、こんな話があるんです。

過去に滅亡の使者を崇拝する呪術師が、連続的に罪の無い人たちの命を

奪うと言う事件が魔法王国アトリアスで起こったのはご存知でしょう。

何千の兵を送ったものの、彼の居場所を掴み取ることが出来なかった。

そこで、女王の命で魔法学園ポラリスの暗黒魔術学部にて呪術師の髪から位置を特定できる魔術を開発したようですよ。

もしかしたら、ポラリスへ行くと何かヒントが得られるかもしれませんよ。」

「そうか。それなら、話は早い。時期を置いてアトリアスへ向かうことにしよう。」

ノアが話しに入る。

「父上、」

「どうした、ノア。」

「父上が帝国を離れるなんて、一体国の政治はどうなるのですか？」

「ノア。私はしばらくエレミア君と共に世界を回らなければならんかも知れんのだ。」

そうなれば政治はおろそかになるのは必至。

ここで急に話す事ではないかもしれないが、お前に政權を渡すことにする。」

「なんと・・・、私がですか・・・。」

「お前には成し遂げられる程の強い心が備わっている。」

父である私が言っているのだ。心配しなくても良い。

それに、もしも道に迷った時は、星占術士のダアトがいる。

我が子を頼むぞ、ダアト。」

ダアトは微笑みながら、会釈した。

思いもよらない急展開にノアは戸惑った。

しかし、彼の力を信じ、求めてくれる父の思いに心をうたれ、

ノアは大役を受け入れた。

「わかりました、父上。必ずや期待に添えて見せます。」

「良くぞ言ってくれた!」

ディアスは愛する我が子を抱きしめた。

微笑ましい光景に皆の心も和やかになった。

夕食を終えたエレミアは、「お先に失礼します。ごちそうさまでした。」と言って、

席を離れて個室へ戻った。

エレミアは寝る前にお風呂に入ることにした。

室内にある大理石の浴槽に暖かいお湯をためて、ゆったりくつろいだ。

そばにあった薔薇の花びらを水面に浮かばせていると、あまりにも心地よさに、そのまま眠ってしまった。

翌日、エレミアはディアスに呼ばれて玉座の間にいた。
何かを渡し忘れていたらしい。

ディアスは玉座から立ち上がり、エレミアの前まで寄って言った。

「これはエレミア君が持つておくべきだろう。」

腕に握られた七星剣。両手を差し出すエレミアにそっと渡した。
ディアスは玉座に戻り、話を続けた。

「しばらくは宮殿内でゆっくり生活したまえ。

四月の初めに新市街の広場でノアを副帝として称号を与える授与
式を挙げる。

それと同時にケテルの死を国民の前で打ち明ける。

エレミア君は顔を出さぬようにな。

それが終わったら、私と共に魔法王国アトリアスへ向かおう。」

昨晚の会話のうちに出来た魔法学園ポラリス。

もとのいた時代、エレミアが通っていた学校と全く同名である。

この時代のポラリスはどんな風なのか。はやく行って確かめたい。
わくわくして思わず表情に出してしまう。

それをみてディアスはエレミアに聞いてみた。

「魔法に興味がありそうだな。」

「はい。とても！」

「聞くところによると、エレミア君は不思議な能力が使えるようだな。

筋力だけの私には無縁のことだが、少しは取り入れなければなら
んだろうな。」

ポラリスで用事が終われば、学校内を見回ると良いだろう。
それまで退屈だとは思うが、ゆっくり体を休ませておくといい。」

エレミアはお辞儀をして玉座の間を出て行った。

それから、数日に渡る優雅な生活を送りつづけた。

何事も無い、平和で裕福な暮らしはあつという間に過ぎていった。

四月の初め。

新市街の広場にて、ノアの副帝称号を授与する式が執り行われた。

帝国に住まう民のみならず、世界各地から訪れた人々も集まり、

広場の地面が見えないくらいに人で敷き詰められている。

帝国の兵士達は楽器で演奏を始めた。

ファンファールが鳴り響くなかで、

中央のブロンズ像の前に、ディアスとノアが姿を現す。

用意されていた黄金の椅子にノアが堂々と座る。

群衆のざわめきが静まり返る。

開式の挨拶がおわった後、大臣が勲章を持ってきて、ディアスに手渡した。

ノアは立ち上がり、ディアスと向き合うように並んだ。

凛々しい顔立ちを見て、立派に成長した我が子に感服しながら、ノアに勲章を授ける。

「ノアに副帝の称号を与える！」

その瞬間、群衆は拍手や掛け声、口笛を鳴らし、歓喜に溢れかえった。

「ノア様あー！万歳ー！！」

押し寄せる記者のカメラによるフラッシュも絶えない。

ノアは群衆の前で軽く挨拶をした後、授与式は終了した。

5分の間をとって、ディアスは群衆に英雄ケテルの死を知らせた。
辺りは一気に静まり返った。

世界に散らばった滅亡の使者に警戒するよう注意を促す。

ディアスは人々の平和を確立するよう、誓いを立てた。

群衆は皆、帝国に希望を託し、支えあうかのように再び歓喜で盛り上がった。

身分を打ち破り、人々は家族のように一丸となった。

こうして、行事は終了し、集会は解散した。

そのころ、エレミアはもと着ていた服に着替えて、
出発の準備を整えていた。

貴族生活を十分に満喫した思い出は永遠に忘れることは無いだろう。
身だしなみを整えたエレミアは部屋を出ようと、ドアを開けようとした。

その時、タイミングよく誰かがノックをした。

エレミアは「どうぞ」と言いながら、

ドアの向かいに立っている人を部屋に入れた。

誰だろうか。見たとこの無い男性である。

黒髪で体格の良い、白銀の鎧を身にまとった戦士。
背中には重そうな大剣をかけている。

エレミアは思わず質問した。

「あの・・・、どちら様ですか？」

戦士は答えた。その声を聞いてようやく正体がわかった。

「私だよ。エレミア君。」

「えー?! 陛下? なぜそのような格好に?!」

「皇帝である私がそのまま世界を旅していれば、

大騒ぎになるだろう。そうなれば君が大変な目にあってしまう。

それに、私が帝国にいないと知れ渡れば、

国民に不安を抱かせるばかりでなく、国が攻められてしまうかもしれないぬ。」

「なるほど・・・。」

「しばらくの間、私は普通の旅人としてなりきるつもりだ。

出発の準備は整ったかい?」

「はい、陛下。」

ディアスは笑った。

「ははは。それじゃあダメだな。呼び捨てにしてくれて構わない。

主役は君だ、エレミア。」

「あっ、はい。」

「ぜんぜん抜けてないな。ははは。

まあそのうち、変わっていくだろうが。そろそろ出発しようか。」

エレミアは気持ちを入れ替えて、元気よく返事をした。

「うん!」

目的地である魔法王国アトリアス。

期待で胸いっぱいに広がるエレミアに、一体どのような運命が待ち受けているのだろうか。

七星剣はその答えを知っているかのように輝きを発している。

エレミアは七星剣を握り締め、ディアスと共に、帝国を離れてゆくのであった。

＜第五節＞ 世界の幕開け（後書き）

【加わった仲間】

・ディアス

【ホークアイの言葉】

ごきげんよう。

私はアルシノエ第3代目に当たるシャーマンのホークアイと言う。序盤はいかがでしたか？ ちよつと在り来たりな流れと感じた貴方。そう思われても仕方無いかもしれませんね。フフフ。

次回の章から若干、物語の組み立てられ方が変わります。

ほんの少しだったかと思われませんが、変なアイテムも手に入ったことでしょう。これは後のお楽しみと言うことで。

それではまたお会いしましょう・・・。

<ささやく森>

<ささやく森>

太陽が帝国の全土を明るく照らし出す。

眩しさに見とれながら、エレミアとディアスは宮殿の庭に出ていた。エレミアは立ち止まり、地図を広げる。

「ここからアトリアスまで、かなりあるわ。」

ディアスは地図に示された道を指でなぞりながらプランを立てた。

「それならば、馬車を使っていくといい。

ささやきの森をぬけて、運命の橋で一旦休むことにしよう。」

「わかったわ。」

帝国の南には、あの漆黒の大地がある。

しかし、常人は生きて帰ってこれない。滅亡の使者のいない今であっても、

奴の瘴気は残っており、地を腐らせているのだ。

そのとなりにあるのが、ささやきの森。

大昔に魔女たちが住処にするため、荒々しい大地を木々で埋め尽くした。

小動物がすみつくようになるくらい、緑にあふれている。

漆黒の大地は森を食らおうとしているようだが、

魔女の力のお陰だろうか、何とか押さえ込んでいる。

ディアスは安全な道を選んだのだ。しかし、その森にも危険はあるという。

なんでも、木々の精が通りかかる者にささやいて、心を闇に包んでしまおうらしい。

行き先を確かめた二人は、宮殿の入り口に用意されていた馬車に乗った。

美しい二頭の白馬は話しかけるかのようにこちらの顔をうかがう。

「ハイヤー！」と運転手が掛け声を出すと、白馬は息を合わせて走り出し、

広い街路を駆け抜けて、帝国を離れていった。

何気ない荒地を駆け抜けて行き、柿色のキャンバスに植物の緑色が塗られていった。

そして、いつのまにか馬車は森の中を走っていた。

次第に深みを増してゆき、澄み渡った空が覆われて見えなくなる。

薄暗くなった時、ディアスが注意する。

「エレミア、両手で耳をふさぐんだ。森を抜けるまで、手を離さないようにな。」

二人は耳をふさいだ。

森のざわめきの音が、やがて、人の声のように聞こえてくる。

あたりの木々を良く見てみると、幹から顔が表れているではないか。

エレミアは知らず知らずのうちに、すこしだけ手の平を耳から離してしまふ。

木の精がクスクスと笑い出し、木々同士で話し始めた。

「ねえ、皇帝ともう一人、女がいるみたい。」

「知らないヤツ。みたことないね。」

「この世の人間とはすこしニオイがちがうね。」

エレミアは少し気にかけた。まわりの木の精たちを目だけで追って見ている。

木の精はエレミアにささやき始めた。

「おまえ・・・、英雄を死なせてしまったんだってな。クスクス・・・。」

おまえさえいなければ、滅亡の使者がやつつけられて、

世界は元通りになるはずだったのにね・・・。」

いまさらそんな言葉を聞いたところで動じない。

面白くない木の精たちは、どうにかエレミアを陥れようとささやき続ける。

「おまえ、別の次元からきたのか？」

「おまえ、一人の男に会おうとしているのか。」

「クスクス・・・。もう無理だよ。」

なぜなら、おまえの好きな男、英雄の子孫なんだからさ。クスクス・・・。

この意味、わかるよね・・・。」

エレミアはボーっとしている。

様子がおかしいと気付いたディアスはエレミアの肩を揺さぶった。

「エレミア！おい、しっかりしろ！」

「・・・。ヨハネが消えてしまうの・・・？」

「クソッ！」

ディアスは木の精に向かってにらみ付けた。

その龍の眼と思わせる凝視によって、木の精たちは恐れをなして

何気ない普通の木々にもどっていった。

ささやきの森をぬけてゆき、浅い草原にでたころ、ディアスはエレミアに話を聞いた。

未来からやってきたことを打ち明けるが、ヨハネの話はできなかった。

少しの表情も変えず、真面目に聞いてくれたディアス。

「そうか……。何やら一つの目的があるみたいだが、奴らの言葉など気にするな。

エレミアのいた世界と、この世界は別だ。

想いを貫いていけば、必ず願いは叶うはずだ。」

ディアスは肩を優しくたたき、勇気付けてくれる。

そのお陰でエレミアは我を取り戻し、心の闇をふりはらった。

「……うん。そうだよね！」

「そうだとも！」

おっ、橋が見えてきたぞ。」

二人をはこぶ馬車の前には、巨大な橋が二つの大陸をがちりとつかんでいる。

橋のゲートを一たびくぐれば、

そこから運命を大きく変えられてしまうような威圧感に迫られる。

そんな感覚を味わいながらも、予定していた通り、近くにある村で馬車をとめ、

エレミアたちは一息つくのであった。

<運命の橋>

<運命の橋>

木造の家がならぶ小さな村。ときどき、小鳥のさえずりが心を和ませる。

エレミアたちは、レストランで食事をしていた。

馬車の運転手はコーヒーの香りをたのしみ、ディアスはシカ肉のソーテーをかぶりつく。

エレミアはチョコレートパフェをふたつもペロリとたいらげた。

木の香りとチェロの生演奏を楽しみながら、ゆったりとしたひと時を過ごす。

満足げな三人は休憩を終え、レストランを後にした。

「それでは引き続き頼むぞ。」

「かしこまりました。」

そういつて再び馬車を走らせた。

橋のゲートの前には検問がある。

マスケット銃をもった兵士が4人、こちらへ向かってきた。

一人の兵士が通行証を求めた。運転手は紅い革製のケースに入った通行証を見せる。

「うむ、たしかに。車内も確認させてもらおうぞ。」

もう一人の兵士が馬車のドアを開けて車内を確かめた。

緊張する二人の顔を見て、兵士は扉を閉めて下がる。

ふと思う。男の顔、どこかで見た気が……。

そんな上の空ではあったが、深く追求しようとはしなかった。

「よし、通ってよいぞ。」

馬車は再び走り出し、運命の橋を渡ってゆく。

橋の幅は車が三台並んで通れるほどの広さがあり、最短にいる人が米粒くらいになるほどの距離がある。

ところどころの石柱には模様が描かれているが、良く見ると、矢じりの穴や剣による傷、血痕の後が昔の戦の爪あととして残っている。

足もとは木と頑丈な鎖でつながれており、木と木の隙間からは海がのぞいて見える。

できるだけエレミアは見ないようにと座席の中で縮こまった。

冒険者の一行や商人、観光で訪れている人々。

いろんな人とすれ違いながら、馬車はゆったりとした速さで進んでゆく。

波の音を聞きながら、橋の終端にたどり着くのを待っている。

いよいよ、次の大陸であるプラネテシアの大地が見えてきた。

終端に構える検問でも同じように調べられ、確認を終える。

ようやくエレミアたちはプラネテシア大陸に到達するのであった。

＜搜索魔法開発記録 その1＞

＜搜索魔法開発記録 その1＞

プラネテシア大陸。辺りは草花が生い茂り、蝶が舞う。様々な小動物がすんでおり、朝のおいしい空気で清々しく、人々の住みやすい環境となっている。

目的地の魔法王国アトリアスまであともうすこし。

エレミアはあたりの花畑に見とれている。そこに何匹かの妖精が遊んでおり、こちらに気付いて手をふってくれた。

小高い丘のむこうに王国が見える。

地上から10メートルほど、空中に浮かぶ小さな島に澄み渡る青いグラデーションが印象的な城が建っている。

その浮遊する城を囲むように、地上に城下町が存在している。さらに城下町の中に、学園らしき建物もある。

エレミアはわくわくしながら待ちきれない様子。

馬車は少し速度をあげて、王国へ向かっていった。

『ようこそ、魔法の国へ』

看板を見つけると、目の前はすでにアトリアスの城下町が広がっていた。

すこし町中に入ったところで馬車をとめ、二人は降りた。

さすがは魔法王国あってか、どこを見ても魔法使いだらけ。そのほかにも、ゴブリンやエルフといった種族も暮らしているよう

である。

ディアスはアトリアス城へ行こうとエレミアに声を掛けるが、魔法商店に目を輝かせていた彼女には聞こえていなかった。そんな彼女を見て、少し微笑んだ。肩を二、三度軽くたたいて気付かせる。

「あつ、ごめんなさい。見てみたいものがいっぱいありすぎて・・・」

「ははは。そうか。」

先に用事を済ませたら、あとでゆっくり買い物しようか。」

「うん！」

楽しみは後にとっておき、先に城へ向かうことにした。

といってもここから城まではかなりの距離。

ディアスは何度かアトリアスに訪れており、とある場所へと案内してくれた。

そこは転送魔方陣。

町の各区分に設置されており、瞬時に好きな区域へテレポートが出来る。

青白く光る魔方陣の上にとると、二人の姿はその場から消え去り、城へ飛んでいった。

城門前にテレポートした。

急にうつり込む大きな城の景色にびっくりする。

大きな口をあけた城の入り口には、魔法壁が張られてあり、二人の鎧兜の騎士が見張りをしている。

しかしよくみると、中身は空っぽのただの甲冑である。

近づくとも勢いよく剣で城内への道を封鎖する。

ディアスは右腕のすそをまくりあげて、鍛えられたムキムキの腕を見せる。

腕には皇帝ディアスの証明とも言える、龍の焼印が刻まれていた。それを見た甲冑は、すぐさま剣を控え、置物らしくおさまった。

入り口にかかっている魔法壁は、カーテンが開かれるかのように解けていった。

城内はすこし薄暗く、青色に揺らめいて照らす燭台が怪しげをかもし出している。

見張りをしている魔法兵士は年頃の男女ばかり。

二人はまっすぐ進んで行き、先ほどと同じような転送魔方陣の前へたどり着く。

各部屋とのつながる通路は無く、ここでレポートしなければならぬ。

そのため、外から見た城の形はあべこべになっている。

女の魔法兵士は二人に行き先を聞くと、ディアスが女王の所へ送るよう頼んだ。

呪文を唱えると、魔方陣が緑色に輝きだし、ルーン文字で女王の間と浮かび上がる。

二人は魔方陣に乗って、レポートしていった。

久しぶりの訪問にディアスは落ち着かない様子。

エレミアはなぜか、この場の空気になじんでいる。

心の準備をする間も無く、二人は扉の前に立たされていた。

ディアスがノックしようとする、その必要も無いように、勝手に扉は開いた。

中に入っていくと、扉は手を触れることなく閉まっていった。

ずらりと並んだ本棚があり、ひとりでに動くホウキが床を掃除している。

さらに奥へ進んでゆくと、いろんな色のネコがやって来て、ニャンニャン鳴きながら足元からみ、二人になついて来る。

精霊樹でつくられた曲がりくねる机の上に、ドクロのシヨクダイが灯され、

椅子に座っている女王の姿があらわれた。

猫のような瞳を見れば、たちまち魅了され、唇でセクシーさをも出し出す。

露出度の高い青のグラデーションに染まったドレスで男たちの心を惑わす。

魔女の純血が流れており、世紀を超えて生きているという。

女王は誘惑するかのような微笑を表しながら、

「おひさしぶりね。陛下。ゆっくり座ってお話しましょうか。」

といって、絨毯の上を指差すと、光と共にソファアが現れた。

二人と女王は向かい合うように座る。

つづけてテーブルが現れ、花柄のカップとポットがやってきて

女王は魔法で紅茶をいれる。エレミアはその動作に思わず見とれていた。

お茶を注ぎ終わると、女王は話を始める。

「うふふ。また領土を支配しに来たのかしら？」

ディアスは苦笑いをして、

「それはもう、大昔のことだろう。」といいながら、気を紛らわすかのように紅茶を飲んだ。

女王はエレミアに話を振った。

「かわいらしいお嬢様ね。いつのまにこんなお子様を？」

「我が子などではない。ふざけている場合ではないのだよ。」

真面目な顔をしてディアスはこれまでの経緯を語った。

「そのことについては既に承知しておりますわよ。

大陸の各町の兵士に伝令も送りましたし。

ふふ……。ちょっと固くお考えすぎなのは……。？」

女王はディアスの頬を手のひらでさすろうとした。

しかし、うっとうしそうにその手をのける。

かわいらしい行為に女王は笑い、再びエレミアの顔を見て話を続ける。

「あなたは見ない顔ですわね。

ふふっ。何も言わなくていいですわ。既にわかっていますからね。

これから先の運命、いくつもの試練が待ち受けているかもしれない。

どのような未来が訪れようとも、貴方の行動で全てがつくられますわよ。

貴方の想いを常に忘れずに活かしていれば、きっと願いは叶うはずですわ。

恐れずに前を向いて歩いていきなさい。

たまには振り返って見直すことも忘れないで。」

「ありがとうございます。」

女王は振り返り、机の引き出しから何かを浮かばせて、

空中移動してきてエレミアの目の前に置かれた。

学生手帳だ。魔法学園ポラリスのエンブレムが記されている。

女王が手帳に手をかざすと、エレミアの顔写真が浮かび上がった。

エレミアは子供のように目を輝かせながら、手帳をてにとった。

「うわあゝ。学生手帳だゝ！」

「あなたにはこの世界にはない能力があるようですね。

しかし、滅亡の使者を倒すにいたってはまだ未熟です。

貴方の能力はもっと大きく成長させることが出来ますわ。

ポラリスは私の造りだした学校です。そこで学びなさい。」

「はい！」

エレミアの笑顔をみて、ディアスもつられて笑顔になった。

そんな彼の顔をみて、女王はすこし丸くなったなと感じながら、話を続けた。

「陛下？ポラリスの暗黒魔術学科に立ち寄ってくださいね。
学部長なら、探索魔法を知っておられるはずですよ。」

「そうか。いろいろとすまないな。」

エレミアとディアスはそろそろ出発しようとソファアを離れる。
女王も紅茶を飲み終えて、その場を立って二人を見送った。

「ふふふ。またいらしてくださいね。陛下。」

エレミアさんも、いつでも遊びにいらして構いませんわよ。」

「はい、またきます。」

だが、ディアスは当分立ち寄りたくない気分だった。

二人はアトリアス城を出て、魔法学園ポラリスへ向かうのであった。

＜搜索魔法開発記録 その1＞（後書き）

【入手したアイテム】

- ・魔法学園ポラリスの学生手帳

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795ba/>

星の使徒 ～古の賢人～

2012年1月14日17時51分発行